P.-J. プルードンとロベスピエール　―生存権をめぐる祝祭論―

報告者：田中昌平(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)

司会：奥田敬（甲南大学）

【報告の概要】

　本発表では、１９世紀フランスの社会思想家ピエール＝ジョゼフ・プルードン(1809-65)が、『日曜祝祭論』（1839：以下『日曜』）の中で展開した宗教社会論と、ロベスピエールの宗教論とを比較することで、『日曜』に現れているプルードンのフランス革命認識を明らかにした。

　この論証にあたり、あらかじめ『日曜』を取り扱った先行研究における問題点を提示し、次節で『日曜』が生存権保障に立脚した社会の組織化を正当化する著作であったことを示した上で、同著の第3章にて行われるロベスピエールからの引用が、原典からは書き換えられたものであることに注目した。そこで続く節にて、ロベスピエールの当該文書（「最高存在の祭典について」）を検討し、両者の間では祝祭の発生過程に関する認識に大きな違いがあることを明らかにした。そしてこの異同も踏まえて、生存権保障とそのための祭典は人間にとって「必要」なのであり、既に存在してきているのであって、統治者が作り出すようなものではないというプルードンの主張を浮かび上がらせた。同時に、『日曜』がジャコバン主義の換骨奪胎を目指した著作であることも明らかとなった。

【質疑応答の概要】

　本発表に対しては、まず**①先行研究においても、『日曜』と後の著作との連続性は指摘されてきたのではないか**というご批判が寄せられた。この点について、既存の「連続性」を捉える先行研究においても、『日曜』はのちの著作に向かうまでの過渡的著作として扱われており、相対的に過小評価されている点では共通していると整理した上で、本発表は、『日曜』が以後の思想と共通する、極めて重要な宗教認識（あるいは法認識）に貫かれているとまとめており、先行研究よりも強く「連続性」を主張しているのだと応答した。

　続いて**②「社会問題」への関心は同時代の社会思想家が共有していたが、ならばプルードンは「孤立」していたと言えるのか**とご指摘いただいた。このご指摘に対して、まず本発表では、「社会問題」への関心を持つがゆえに「時代的」であったという意図で記述していたのだと説明した。その上で、プルードン自身は後世に引き継がれるような体系的理論を構築せず、加えてプルードン思想と彼以前の思想との継承関係も明確ではないため、歴史上であたかも彗星の如く現れては消えてしまった思想家のように扱われてきたという意味で「孤立」という表現を使ったのだとお答えした。

　最後に**③「祭礼で義務付けられた信仰実践」が生み出す宗教的感情が、民衆の心理の中に既にあるものの表出であるとすることには論理的飛躍があるのではないか**というご批判をいただいた。このご批判に対し、本発表での推論はプルードンによる「改変」の前後だけではなく、『日曜』全体とロベスピエールの議論全体とを対照させることによって導き出されているものであると応答した。ただし、ここでいう「民衆の心理」は、文字どおり「民衆」の中にあるのであって、個人の中にあるものではないという読解まで織り込んだ表現となっており、その説明は確かに不十分であったと弁明した。

　なお、**「集会の中で現れてきた「必要」こそ、「神という名」「真理という名」が付けられてきたものだとしている[CD:66]」（p.9）の引用について、正しくは[CD:46]**でした。改めて細心のチェックを心がけるように誓いつつ、お詫びいたします。